

SuMi TRUST
With You

スペシャルピックアップ

長い老いを生きる 納得できる旅立ちのために

キラリ! CSR活動 信託を活用した林業再生にチャレンジ!

シニアライフの安心・安全 自宅暮らしのワンポイントアドバイス
～災害に対する自宅の備え～

キラリ! CSR活動 信託を活用した林業再生にチャレンジ!

わが国の国土の66%をしめる森林は、自然資本の最も重要な基盤です。私たちは、国土保全や地方創生に多大な影響を与える森林所有者の不在・不明問題や放置森林問題を解決する手段として森林の信託に着目しました。当社が森林の所有者(受託者)となることにより、相続などによる未登記森林の発生を抑えたり、村外地主に成り代わって森林保全を行うことを検討しています。これにより将来にわたって安定かつ効率的な林業経営の基盤づくりが可能となると考えました。さらに、林業経営への

関与をしっかりと行うことにより、川下にある産業(製材、木工、養殖等)の発展にもつながり、地域全体に就業機会を増やす活性化にも貢献できると考えています。実際の導入に向けて、さまざまな課題を克服するために、「森林信託導入基礎調査」を開始しました。本調査では、信託の導入に加え、収益性の高い地域産業を育成するための事業スキームの検討も同時に行います。林業によるGDPは、約2,000億と500兆の国内GDPの内、0.1%にも満たない状況に陥っています。国家レベルでも森林環境税の導入

など、林業活性化に向けた戦略も動き出します。森林信託の開発は、国、地方公共団体、民間林業事業者、森林組合、地域住民の皆さまと連携して地域を活性化する目標を踏まえた、信託銀行ならではの活動です。



調査対象となる国内森林の様子

シニアライフの安心・安全 自宅暮らしのワンポイントアドバイス ～災害に対する自宅の備え～

東日本大震災が発生してから丸7年が経ちました。南海トラフ地震や首都直下型地震などの発生も予測されていますが、非常持ち出し袋の用意以外に、下記のポイントを意識して、いざという時に備えることが大切です。

家具の固定・避難経路の確保

家具や重い家電製品の固定に加え、地震発生時に家具転倒による逃げ遅れが発生しないよう配置の見直しを。

また、リビングや階段付近に置かれたもので避難時に転倒しないように、部屋の整理整頓を常日頃から行いましょう。

備蓄品の準備と定期的な点検

食品や飲料水のほか、トイレトーパーなどの生活用品を備蓄しておきましょう。常備薬など自分しか使わないようなものも用意します。また、使用期限のある電池や使い捨てカイロなども定期的な点検し、いざという時にきちんと使える状態にしておきましょう。

災害時の行動確認

突然の揺れが起きた時に身を守る方法や、揺れが収まった時にとるべき行動を、日頃から確認しておきましょう。家族や親しい人との安否確認の方法や、最終的な集合場所を決めて確認することも大切です。

(セコム株式会社様が運営する高齢者の相談窓口「セコム暮らしのパートナー久我山」より寄稿いただいております。)

表紙の写真 アール・ブリュット作品紹介 「無題」勝部 翔太 Shota Katsube 1991年生まれ 島根県在住

勝部氏の作る人形の素材は、雑貨店で売られている「アルタイ」という商品名の、袋などの口を括るための針金です。小さなハサミや爪切りをスピーディーに使い分け、1体を30分から1時間半かけて作り上げていきます。人形のサイズは約3cm。さわめて極小にもかかわらず、躍動感みなぎる生き生きとした形をしています。目を近づけてよく見ると、その迫力にはドキリとするものがあります。モチーフのイメージはアニメーションの中の戦士たちですが、既存のもの模写ではなく一体一体が彼流のデザインになっています。

作り始めると迷いなく、完成形が既に見えているかのように手が止まることがなく、彼の素早い手技はリズムカルで、職人のように動きに無駄がありません。この制作は10歳の頃から始まったようです。

それにしても、何故この小ささなのだろうかと思ひ、勝部氏に尋ね

てみると「作りやすいから。」と単純明快な答えが返ってきました。確かに彼は手の内サイズの触覚的な作業から、とても心地良い感触を得ているようです。

(執筆者 ボーダレス・アートミュージアム NO-MA アートディレクター はたよしこ)

※アール・ブリュットとは、「アール(Art)」は芸術、「ブリュット(Brut)」は磨かれていない、加工されていない(生のままの)という言葉を表すフランス語で、正規の美術教育を受けていない人々が独自の発想と方法により制作した作品のことを指します。

協力: 社会福祉法人 愛成会



「無題」



「無題」勝部 翔太

情報満載! CSRサイトもご覧ください。

三井住友信託銀行CSR

検索

長い老いを生きる

人類の悲願であった長寿を、世界に先駆けてかなえた日本人の平均寿命は、今や100歳に近づいています。「長くなった老後」という未知の世界では、どのようなことが起きるのか、老いに伴うさまざまな事ごとどのようにつき合っていけばよいのか、一人ひとりが手探りでその答えを探していくことになるのでしょうか。私たちが生きるこの時代を、データで確認しながら、豊かな老いとのつきあい方について、国際長寿センター日本の志藤 洋子事務局長に解説いただきます。



国際長寿センター日本 (ILC-Japan) 事務局長
志藤 洋子氏
 高齢者が、社会の半数近くをしめる時代に向けた広報啓発活動を行う。ILCはProductive Agingを基本理念に、超高齢社会における新たな価値観の創造と、社会と個人の意識改革に向けた活動を、世界17カ国で行っている。

納得できる旅立ちのために

長い老いを生きることは、病とともに生きることでもあります。平均寿命70歳台の1980年頃の死因1位は、脳血管疾患。脳卒中などを発症し短期間で命を落とすことが多い時代でした。現在の1位は悪性新生物(がん)で、脳血管性疾患は死因としては4位です。しかし発症率に大きな変化はなく、医学の進歩で

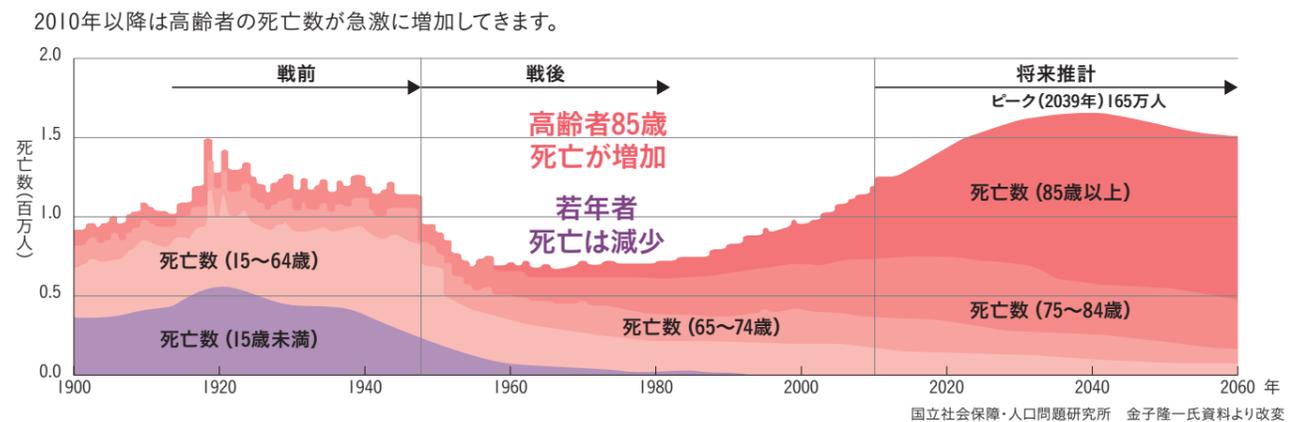
一命を取り留める確率が高くなり、麻痺や脳血管性認知症などの後遺症とともに生きるようになったわけです。老いや病と折り合いをつけながら寿命を全うし、自分らしい往生を遂げる、つまり納得できる旅立ちのためには、何をすべきかについて考えてみたいと思います。

疾病概念の変化と暮らしを支える医療

まず医療には限界がある、万能ではないことを理解しておかなくてはなりません。治せない病気もあれば、治療に伴う心身の負担が想像以上に厳しい場合もあります。特に高齢者は個人差が大きい上に、複数の疾病が互いに関連しあって重症化しやすい傾向があります。85歳のがん患者にとって、どの治療がベストなのか、標準的な答えは出せません。治療のための投薬で腎臓や肝臓機能が低下することなどもあります。疾病概念の変化から、高齢者にとっては治癒・救命を目指す「治す医療」から、機能改善や生活支援を重視する「支える医療」が大切と言われるようになってきました。

高齢者が暮らしの場で、自分の生活を優先させながら医療や介護を受ける、そんな「在宅医療」のシステムも充実してきています。また身近な「かかりつけ医」を持つことで、自分にとってふさわしい治療を相談しながら、地域で安心して暮らしを継続させることもできるようになりました。「生老病死」は人間として当たり前の姿であることを受け止めながら、自分の人生観を基に、医療に何を求めるのか、病とどのようにつきあっていくのかを、じっくり考える時代を迎えていると言えるでしょう。

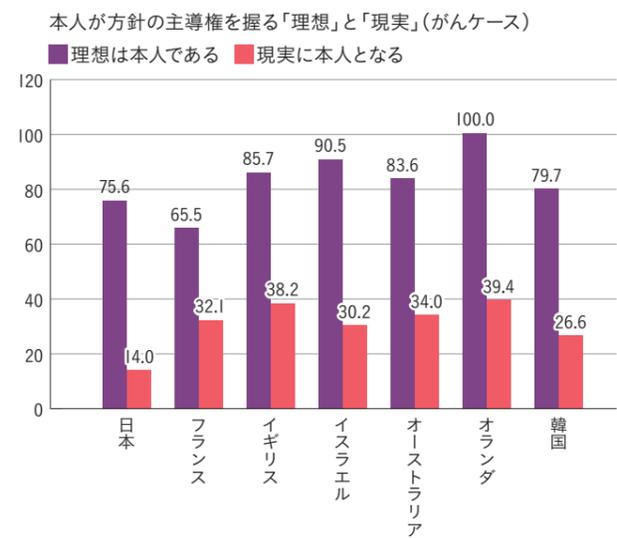
多死時代—どこでどのように亡くなるのか



天寿を全うした高齢者が、多く亡くなる時代、一人一人の人生の集大成、ゴールを目指す多くのドラマがあります。できればその時を、悔いなく迎えたい、そのための身終いをしておきたい…しかし、そのためにはどのような最期を迎えたいかについて、自分なりに考えを持っておくことが必要になります。

国際長寿センター日本では、2011年に「理想の看取り」についての国際比較調査を実施しました。

● 本人が自分の最期の方針を決める割合が一番低いのが日本



日本の特徴としては、以下の3点が挙げられました。

- 理想と現実のギャップが大きい—看取りについての国民的なコンセンサスがない
- 治療方針決定時に本人のQOL(Quality of life ;生活の質)や尊厳より、生存期間や家族の意向が優先されがち
- 本人と家族などが「死」について話し合うことが避けられているため、本人の意向がわからないことが多い

そこで私たちは、専門家による編集委員会を組織し、ガイドブック「納得できる旅立ちのために」を2015年に刊行し、その後、一般書として「私らしく死にたい」(水曜社刊 2016)を出版しました。

これらの本では、がんや脳卒中など死亡や障害の原因になる疾患を挙げて、仮定のモデル78歳の方々の発症から旅立ちへの道のりについて、病気の進行や治療・介護などの変化に、家族の気持ちや本人の思いなども重ねて記してみました。



もちろん個人差が大きいことですから、あくまで一般的な例ですが、治療法の違いによるその後の症状、合併症の怖さ、家族間の意思のズレや暮らしの場所も含めた人生設計の書き直しなど、さまざまな事柄と情報を盛り込んでみました。

情報を得て、考えて、決める

人生の最期について自分なりに考えるためには、まず病気になるとどのようなことが起きるのか、治療にはどのような選択肢があるのかを知ること、そして自分で考えて決めたら、それを周りとも共有しておくことの大切さを、ともに考えてみたいとの思いで、これらの本を作りました。

本人の考えがわからないと、その尊厳が守られず、命の質より長さが重視されることもあるのです。せっかく長生きできたのに、その最期が不本意なものにならないようにするためには、誰かに自分の人生を委ねたり任せたりするのではなく、自分で考えて決める努力も必要になってきます。

しかし、いざ死を前にしたら心は揺れます。いくら自分なりの覚悟をしていても、不安でたまらなくなるでしょう。でもありがたいことに、私たちに生物として安らかに死を迎えられる仕組み、プログラムが備わっているのだそうです。

● 人間の身体がもつ「死にゆく力」を邪魔しない

ヒトは、進化の過程で「死のプログラム」を獲得した
 やすらかに「死」を迎えられる仕組みが備わっている
 身体に備わっている「死にゆく最後の力」を最大限に引き出すことが、やすらかな最期につながる

あすか山訪問看護ステーション 総括所長 平原優美氏

自分の寿命を全うする時に、これだけ長生きして偉かったね、と自分を褒めながら静かに最期の時を迎える、そんな時代の旅立ちはまさに稔りの時と言えるのだと思います。

■2017年度のスペシャルトピックは「長い老いを生きる」というテーマを連載しました。

- 第1回 データでみる少子高齢社会日本の姿
- 第2回 自分の老いと向き合う
- 第3回 認知症への新しいアプローチ
- 第4回 納得できる旅立ちのために

※CSRサイトでバックナンバーをご覧ください。

■CSRサイトではアクティブなセカンドライフを楽しむためのヒントをご紹介します。

<http://www.smtb.jp/csr/withyou/successfulaging/>
 (本スペシャルトピックに関連するページ)サクセスフル・エイジング>健康・認知症